世界のおもな登山記録2019

池　田　常　道（日本山岳会会員）

1　ネパールおよびチベット

カンチェンジュンガ（8,586m）

近年の公募隊は、かつて困難と言われたこの山やマカルーにまで進出して多くの登山者を頂上に送るようになり、2019年春には50人以上のクライアントとシェルパが、南西面通常ルートから主峰の頂上を踏んだ。しかし、経験の浅いクライアントは頂上からの帰途で余力を失い、行方不明になったり高山病で倒れたりと、事故が絶えない。19年春には３人が遭難死、他にインドの２隊員が、8,000m×14座を半年余りで登ろうという「プロジェクト・ポッシブル」を遂行中の退役グルカ兵、ニルマル・プルジャ・マガール（36）のチームに救助された。

ジャヌー（クンバカルナ、7,710m）

1962年フランス隊の初登頂以来、この難峰に挑んだのは52隊。そのうち頂上に立ったのは17隊（32.7%）しかなく、登頂したのは65人に過ぎない。初登ルートとなったヤマタリ氷河側の南東稜の他ジャヌー氷河側から北壁、北西稜などが登られたが、ヤルン氷河側の東壁は、1990年代から何度か試みられながら登られていなかった。

ロシアのディミトリー・ゴロフチェンコとセルゲイ・ニロフは２月24日に入国し、まだ冬の範疇に属する３月にこの壁を登ろうとした。ポーランドのマルチン・トマシェフスキを加えた３人の登攀チームは、エリザ・クバルスカ（ポーランド）ら５人の撮影チームと共にBC（4,700m）入りしたが、トマシェフスキは攻撃を辞退した。ロシアペアが、順応期間を短縮して攻撃を急いだため、順応に不安を覚えたからだ。登攀を開始したのは３月16日。18日には大雪が降り、１日100mから200mのペースでしか登れなかった。ヘッドウォールを直登する計画は放棄し、左手のランペから南東稜に抜け、頂上は諦めてフランス・ルートを下ることにした。BCのクバルスカはこの知らせを聞き、峠を越えてグンサ側に移り、複雑な下降ルートを下から無線で誘導した。その甲斐あってか、無事に下降を続けた二人は30日にダンテルの頭（6,449m）に達し、5,000m地点で迎えにきたクバルスカと合流。出発以来18日間のサバイバルだった。二人はこのルートをUnfinished Sympathy（ED）と呼ぶことにした。

カンバチェン（7,903m）

夫妻で8,000m×14座を完登しているロマーノ・ベネトとニヴェス・メロワ（イタリア）が５月に南面から試みたが、アイスフォールに阻まれた。カンチ主峰を目ざす人波から離れてBCを設けた夫妻だったが、クレバス帯に阻まれ、半分も行かずに引き返した。

マカルー（8,485m）

インド陸軍隊の16人を含めて25人以上の登頂者が記録された。半面、ナラヤン・シンが頂上からの帰途8,100mで倒れ、他にもペルーのリカルド・イダルゴ、インドのディパンカール・ゴーシュが亡くなった。ニルマル・プルジャは５月24日、シェルパ３人と登頂した。

チャムラン（7,321m）

チェコのマレク・ホレチェクとズデニェク・ハークが５月17日～23日の７日間で標高差約2,000mの北西壁をアルパイン・スタイルで初登攀した。この壁には2016年秋に今井健司、18年秋に一村文隆が単独で挑み、いずれも遭難死で終わっていた。チャムランの初登頂は1962年の北海道大学隊によって南稜から行われ、86年には酪農学園大学隊が西稜から登頂しているように、日本人にはなじみの深い山である。

ホレチェクとハークは5,300mにABCを設け、ビバーク４回の末に登頂。下降中もう一泊して帰還した。ルート名は、1981年に北壁を登ったダグ・スコット(英)とラインホルト・メスナー(伊)が、登攀中にUFOを目撃したという故事からUFOライン（ABO）となった。

エヴェレスト（8,848m）

ネパール政府が発給した登山許可は過去最高の381。チベット側は（未確認だが）外国人144、中国人12、シェルパ208の計364だという。しかし、前年のような長期の好天は訪れず、５月15日にルートが貫通してから27日までの登頂者885人は22、23日に集中、南峰から頂上まで長蛇の列ができた。大地震でヒラリー・ステップが崩壊して幾分容易になったとはいえ、高所で強いられた順番待ちは酸素不足や低体温症を引き起こし、７人が亡くなった。チベット側での死者は１人に留まった。

公募隊が全盛になってから久しく、気象条件の厳しい秋に挑む隊は途絶えていたが、珍しく５隊がやってきた。しかし秋のアイスフォールには、上部に高さ60mのセラックができてルートを脅かしていたため、各隊とも困難に直面した。ドローンを飛ばして偵察しても危険な状況が確認できただけで、ほとんどの隊が突破を断念した。わずかにスペインのスピード・クライマー、キリアン・ジョルネが、ジェネヴァ・スパー左手の氷壁から南稜に向けて8,300mまで達したと報告しただけだった。

テンカンポチェ（6,487m）

クエンティン・ロバーツ（カナダ）とユホ・クヌーティラ（フィンランド）が秋に、未踏の北ピラーに挑戦した。2006年にカナダのマット・マッダローニとジョン・フルノーがカプセル・スタイルで試みたルートで、今回はアルパイン・スタイルでピラーの頭まで100mに迫ったものの、氷の張り付いていないスラブに阻まれた。

テンギ・ラギ・タウ（6,938m）

アラン・ルソーとティノ・ヴィラヌエヴァ(米)が、秋に西壁をビバーク５回で初登攀した。2002年に日本＝ネパール合同隊が南東面から初登頂。二人は14年11月、パルチャモ（6,279m）西壁に初登攀した余勢を駆って挑んだが、強風に追い返されていた。今回は８年越しの挑戦となった。1,600m、WI5 M5+のラインを４泊５日で初登攀した。

シルヴァン・シュープバッハとシモン・ヴェルフランジェ、シャルレ・ノワロのフランス＝スイス隊は同時期、予定していたラインがアメリカ・ペアに登られてしまったので、その左の新ルートに挑戦。ノワロを除くシュープバッハとヴェルフランジェが北峰の6,820mに抜けた。ルート名はTrinite（1,400m、M6、AI5)。

キャジョ・リ（6,186m）

４人のロシア隊（ヴァシリエフ、オシポフ、リバルチェンコ、シピロフ）が８日間かけて西壁にバリエーションを拓いた。チェコのマレク・ホレチェクとズデニェク・ハークが18年５月に西壁から東壁へ

と回るルートLapse of Reason（ED+ 1600m M6 WI4+）を登っているが、ロシア・ルートは西壁に留まり続けるラインだという。

チュキマゴ（6,257m）

スペインのフェリペ・バルベルデ(44)とダビド・スエラ・フェルナンデスが10月18日に登頂したが、下降中に前者が転落、なんらかのミスでロープが正しく結ばれていなかったらしく、バルベルデは700m落ちて亡くなった。6,000m地点に取り残されたフェルナンデスは近くで登山中の同国人ミケル・サバルサとソニア・カサスに救助を求めた。二人は、スペインの自宅にいたアレハンドロ・チコンに手助けを頼み、彼の手配で救助ヘリが用意された。費用を立て替えるというチコンのおかげで翌日すぐヘリが飛んでフェルナンデスを収容したが、彼らは無許可登山だったうえ、保険も契約していなかった。助かったフェルナンデスは５年間の入国禁止。救助費用４万4000ﾄﾞﾙは両者の家族が負担することになったという。

マナスル（8,163m）

26隊260人が許可を得て、相変わらずの人気を博した。チベットのシシャパンマが登山禁止、チョー・オユーは10月１日を以てBCを閉鎖するなど規制が強まったことから、8,000m峰入門者はマナスルが一手に引き受けるかたちになった。セブンサミット・トレックス、イマジン・ネパールなどの公募隊から9月24、25の両日で30名以上が登頂。ニルマル・プルジャは27日に頂上に立った。

アモツァン（6,393m）

ダモダール・ヒマールのピーク。ヨースト・コブッシュが10月24日に単独で初登頂したというが、詳細は不明である。

シシャパンマ（8,027m）

8,000m峰14座を７か月以内で登ろうという、ニルマル・プルジャ(36)の「プロジェクト・ポッシブル」は、最後のところでチベットの登山規制に阻まれそうになった。春にネパールの６座、夏にパキスタンの５座を手に入れたプルジャは、残る３座を登るべくカトマンズに着いたが、チョー・オユーは10月１日以前に終えなければならないので、これを優先して９月23日に登頂。そのままマナスルBCに入って27日に頂上に立った。

ところが、シシャパンマBCに入る許可が出ない。おりから国慶節とあってカトマンズの中国大使館は長期休暇に入り、チベット入りも叶わないまま待機を余儀なくされた。「７か月で14座」の壮挙を後押ししようとネパール政府も特別許可を要請、登山界からも応援の声が上がり、プルジャとその一行は10月21日、無事BCに入ることができた。頂上に立ったのは10月29日、４月23日のアンナプルナ登頂から189日目のことだった。

チョー・オユー（8,188m）

４月29日、最初の遭難が起きた。ドイツの冒険家マルティン・シュヴェートの率いる10人チームのためにフィックス工作していたシェルパ・チーム５人のうちプジュン・ボーテがC2（7100m）付近のクレバスに落ちて亡くなったもの。この事故の後一行は登山を中止してC1、C2を撤収、遺体の収容は行なわれなかった。

シュヴェートは、2015年に南極点到達のスピード記録を作ったと虚偽の報告を偽の写真付きでネットに投稿、のちに取り消した前科がある。

チョバ・バマレ（チョパ・バマレ、6,109m）

ジュガールとロルワーリンの両ヒマールにはさまれたラプチカン山群のピーク。2014年に解禁されていたが、これまで登られたことがなかった。ジョン・ケリー(米)は2017年12月と翌年３月に東稜から試みたが、最初は東峰を越えたところで敗退、２回目は天候が味方せず、ハイキャンプから先へは行けなかった。彼はインターネットを通じてバンジャマン・ビーイェ(仏)と知り合い、２月から改めて挑戦、南面から東稜を経て初登頂に成功した。

25年ぶりの大雪だというこの冬、カトマンズからのバスは最奥の村ラモバガール手前で立ち往生、ポーター３人のうち２人は雪道を敬遠して帰ってしまったので、残りの３人でピストン輸送、３日間のところを７日かけてBC入りした。ハイキャンプ建設にはさらに３日。登攀開始は２月22日までずれ込んだ。南壁に取付いたのは、日が昇る直前の６時30分。WI3の氷壁を同時登攀で進み、降雪が強まった午後５時半、ビバークに入る。二人で立つのがやっとのレッジしか作れず、テントをかぶって眠れぬ夜を過ごした。翌日は数ピッチしか登れず、再び降雪のなかでビバーク。この夜は、幾分広いレッジを掘ることができた。３日目は50cmの雪をかぶったM3/M3+の岩場を越え、稜線に飛び出す。テントを張ったのは頂上手前150mの地点だった。翌日、数時間で頂上に出たものの天候が悪化し、強風のため３日間もテントに閉じ込められた。18回の懸垂下降でハイキャンプに戻ってみると、すべてのデポ品は雪の下になっていた。BCへのルートは雪崩に蹂躙されており、テントも物資もすべて数mの雪に埋もれて放棄するしかなかった。翌日、ヤク使いの村まで駆け下りて、ようやく暖かい食事にありつくことができた。ルート名はSeto Hi'um（TD 1150m M4 WI4)、白い雪の意味である。

アンナプルナⅠ峰（8,091m）

春季最初の8,000m峰登頂が４月23日にもたらされた。ネパールのセブンサミット公募隊（SST）から隊員15、シェルパ17、合わせて32名が北面通常ルートから頂上に立った。ところが、登頂者のうちマレーシア人の医師ウイ・キン・チン(49)が下山中に遅れだし、7,750mあたりで動けなくなった。付き添っていたシェルパのニマ・ツェリンは自分の酸素を与え、救助を求めて先に下山し、チンは消息不明となってしまった。23日に登頂したニルマル・プルジャは、自身のシェルパ４人とドン・ボーウィ（カナダ）と共に留まり、チンの救出に向かうためヘリを要請した。予備の酸素ボンベ６本を届けるのと同時に、チンを捜索するために自分たち６人を最終キャンプC4まで運んでもらおうとしたのである。

しかし、チンの属していたグローバルレスキューはヘリを運行するシムリクエアと料金面などで折り合いがつかず、派遣は遅れた。会員制の救助組織で、行方不明者の捜索は役割ではないという。公募隊をオーガナイズしたSSTは、チンの位置を伝えたが、そこは法令に定められた飛行高度（7,000m）をはるかに超えていた。グローバルレスキューは23日夜に地上からの捜索を提案するなど混乱、結局24日朝になってチンの妻がシムリクのヘリをチャーターした。

ようやく飛んだヘリは朝8時、7,500m付近で手を振るチンを発見。前日下山していたニルマル・プルジャとミンマ・デーヴィッド、ギャルジェン、ゲスマン・タマンをC3（6,500m）に送り届け、この４人が５時間の登高の末午後5時30分、7,500m地点でチンを救助することができた。これほどの高所でテントも酸素もなしに43時間放置されたチンは、25日朝に飛来したヘリが３回もピックアップに失敗した末、９時にカトマンズへ運び、27日になってシンガポールの病院に収容された。彼の容体はこの時点ですで

に危機的で、５月２日に亡くなった。

SSTによれば、チンは登頂前から歩みが遅かったという。ではなぜ、エスコートしていたシェルパは調子が悪いクライアントを頂上まで無理押しさせたのか。また、チンの他に31人もいたその日の登頂者のうち、ニルマル・プルジャとその仲間たち以外に彼を助けようとした者がいなかったのか。救助の遅れを招いたSSTとグローバルレスキューの対応と同時に、最近の格安公募隊が内包する基本的問題も問われなければなるまい。

２　中国・四川省

ラモシェ（6,070m）

イタリアのトーマス・フランキーニ(30)が５月14日、東壁を単独登攀した。中国の山における彼の単独登攀は、２年前のマウント・エドガー（Ｅコンカ、6,618m）に続くもの。同じイタリアのピエトロ・ピッコと入山したフランキーニは、薬草採りの踏跡をたどって3,400mにBC、4,400mにデポを設けた。

ピッコの帰国後にメイン・フェースに至るダイレクトなアプローチを見つけたので、デポは放棄してこちらのラインを攻める。ストーブと寝袋を基部に残し、ロープもハーネスもなし、手持ちの装備と食料だけで12時30分に登攀を開始。標高差1,500mのルートは氷雪とミックス壁から成り、容易とは言えなかったが、最後は長い頂稜をたどって午後７時に登頂した。闇の中を下るが、ビバークは避け、基部の近くで霧に包まれてルートを失ったときに岩陰で数時間休んだだけでBCまで帰った。

３　インド／シッキム

トリスル（7,120m）

９月29日、国際隊が5,000mのキャンプで雪崩に埋められ、ハンガリーのペーテル・ウィテック(37)が行方不明になった。カナダのトロント大学に籍を置くコンピューター・サイエンティストで、シンガポール、モーリタニアなど６人チームの一員として参加していた。

ナンダ・デヴィ東峰（7,434m）

マーティン・モラン隊長以下12人の英国公募隊が、高所順応と偵察を兼ねて、東峰の南にある未踏の無名峰（6,477m）に挑んで雪崩遭難した。東峰に向かうマーク・トーマスら４人をBCに残して５月22日、モラン隊長ら８人が無名峰に向けてABC（4,870m）を建設したが、31日に5,400mの前進キャンプからよこした連絡を最後に交信が途絶え、その後の捜索で７人の遺体が雪崩のデブリから見つかった。犠牲になったのはモラン以下英国人４人と米国人２人、オーストラリア女性１人、インド人ガイド１人。スコットランド出身のモランは64歳、インド・ヒマラヤには40回以上赴き、初登頂やバリエーションルート登攀に成功してきた。

ポーランドのヤロスラフ・ガフリシャックとヴォイテク・フラチンスキが６月27日、東峰に登頂した。今年は、1939年にポーランド隊が初めてのヒマラヤ登山で東峰初登頂を成し遂げてから80周年の節目に当たる。

秋には、ラジセカール・マイティ隊長の南コルカタ・トレッカー協会隊（４人）が、インドの民間人では初めて登頂した。９月15日にプラディプ・パルがプルバら３人のシェルパと頂上に立ったもの。ナンダ・デヴィ東峰はこれ以前に32隊が挑んできたが、成功したのは14隊と、50％に満たない。

バギラティⅣ峰（6,193m）

マッテオ・デラ・ボルデッラ、ルカ・スキエーラ、マッテオ・デ・ザヤコーモから成るイタリア「レッ

コの蜘蛛」隊が初めて西壁を直登した。Ⅳ峰は09年にスロヴェニア隊（マルコ・プレゼリ隊長）がⅡ峰（6,512m）との間にあるクーロワールから北稜に抜けて初登頂したが、15年に西壁を試みたボルデッラらは6,000m付近に横たわる脆い頁岩のバンドに阻まれ、数百mを残していた。今回は頁岩バンドの左手に突破口を見出し、5,000m地点に設けたABCから20時間のアルパイン・スタイルで９月15日、頂上までつなげることに成功した。ルート名はCavalli Bardani（7b A0）。

バスパ谷

イケルとエネコのポウ兄弟（スペイン・バスク）がヤーコポ・ラルヒャー（イタリア）、シーベ・ヴァンヘー（ベルギー）ら３人と合同して秋にヒマチャール・プラデシュのバスパ谷を訪れ、10日間のうちに３本の新ルートを拓いた。１本目はミディ・ドソーと名付けた未踏の岩峰（4,670ｍ）に拓いたThe Latin Brother（560m 7c+）で、所要14時間。生前兄弟と親しかったハンスイェルク・アウアーを追悼した命名（アウアーは４月にカナダのハウズ・ピークで雪崩のため命を落とした）。２本目は、数日前にオーストリア隊が登った4,900m峰の見栄えのするリッジをたどる600m 6cのルートで所要12時間。故ミケル・リエラを偲んでMiquelinkとした。３番目はゴルベアと名付けた4,500mの針峰に10時間半で初登頂、Beti Alaves（340m 6c+）と命名した。

チョンブー（6,362m）

ミック・ファウラーとヴィクター・サンダーズ、1987年にスパンティーク北西壁のゴールデン・ピラーを登った英国デュオが復活を遂げた。2016年のセルサンク北壁初登攀で健在ぶりを示した二人だが、ファウラーにがんの疑いが出たため治療のためシッキム遠征を延期していた。今回は３月下旬に出発してシッキムに入り、セブ・ラの下にBCを置いてチョンブーを狙った。しかし天候が味方せず、チョンブーの対岸にある5,322mピークに登ってチュングカンと名付けるに留まった。

4　パキスタン

K2（8,611m）

唯一冬季に登られていない8,000m峰に、南東稜から２隊が挑んだ。ワシリー・ピフツォフ隊長のロシア＝カザフ＝キルギス隊と、アレハンドロ・チコン隊長のスペイン＝ポーランド＝ネパール隊である。前者は３月９日に7,500mで断念、チコン隊もナンガ・パルバットで起きた遭難救援（後出）に駆け付けた中断をはさんで復帰し、7,350mにC3を建てたものの、ボトルネックまで行きつけずに終わった。

夏には外国人登山者に対して164の許可が発給され、前年に続く大量登頂も期待されたが、今季はコンディションが悪く、ボトルネックで起きた雪崩でセブンサミット・トレックス（SST、ネパール）隊のシェルパが負傷したため７月中旬までにルート工作を完了することができなかった。この時点で大方の登山者は登頂断念に傾いたが、ニルマル・プルジャ(35)とそのシェルパ（ラクパ・デンディ、ゲスマン・タマン）はSSTのラクパ・テンバ、チャンバ・シェルパと７月24日頂上に到達して道を開いた。同日、無酸素のエイドリアン・ボーリンガー(米)、カルラ・ペレス（エクアドル女性）他１人も続いた。翌25日にはSSTのクライアント10人がネパールシェルパ９人、パキスタン高所ポーター３人と頂上を陥れ、ハンガリーからの１人も成功、今季の登頂者は合計28人となった。

ブロード・ピーク（8,051m）

ニルマル・プルジャは、７か月で8,000m峰14座

を完登するという「プロジェクト・ポッシブル」の一環として春のネパールでエヴェレストなど６座に登頂、パキスタンでもK2の直後にブロード・ピークも登り、ナンガ・パルバットとガッシャブルムⅠ・Ⅱ峰にも登頂、５座すべてをひと夏で片付けた。

スキルブルム（7,360m）

1957年のブロード・ピーク初登頂の直後、オーストリアのマルクス・シュムックとフリッツ・ヴィンターシュテラーが初登頂したとされてきたが、ドイツの史家ヴォルフガング・ハイヒェルは、最近明らかになったクルト・ディームベルガーの日誌に引用されているヘルマン・ブールのコメントやシュムックの著書『ブロード・ピーク』に掲載された頂上（と称する）写真を精査し、シュムックらの初登頂に疑問を呈した。ハイヒェルによれば、シュムックらは頂上に立っておらず、真の初登頂は40年後の広島三朗隊のものだという。惜しむらくは、広島隊長以下中込清次郎、原田達也、菊田佳子、土森譲、永澤茂は登頂から数日後にセラック雪崩の犠牲となり、初登頂であったことを知らずに逝ってしまった。ハイヒェルの論文は『山岳』第114年に訳出されている。

ガッシャブルムⅡ峰（8,034m）

デニス・ウルブコ（ロシア／ポーランド）が南ガッシャブルム氷河からⅢ峰とのコルへと直登し、西壁をダイレクトに登る新ルートを単独登攀した。スペイン女性マリア・カルデルとの新婚旅行を兼ねたウルブコだが、バルトロ氷河のアプローチでカルデルが背中を痛め、順応登山ではC2までしか行けなかった。彼女はBCで支援することにし、ウルブコは７月18日に通常ルートから登頂。その後、ガッシャブルムⅦ峰のイタリア人など３件の救助活動に巻き込まれ、新ルートに対する挑戦は７月31日までずれ込んで、ウルブコは46歳の誕生日を迎えた。夕方７時に出た彼の姿が、C1から見える7,000m付近で確認されたのは翌日の午後１時だった。42時間にわたって登り続けた末、ウルブコは無事C1に帰り着いた。この新ルートは、その名もずばりHoneymoonとなった。

ガッシャブルムⅦ峰（6,995m）

イタリアのカーラ・チメンティとフランチェスコ・カッサルドが７月20日に初登頂した。チメンティが頂上からスキー滑降する一方、カッサルドは歩いて下山したが、後者は500m滑落して負傷し、チメンティに付き添われてビバークする羽目になった。救助要請が受け入れられ、陸軍ヘリは翌朝飛来することになった。チメンティはカッサルドをヘリの着陸できる場所まで移し、彼らのC1（5900m）を往復して一夜を過ごすための装備を運んだ。ところが、ヘリはやってこない（K2とブロード・ピークから帰国するSST隊のクライアント８人を運んでいたという）。BCにいたウルブコとドン・ボーウィ（カナダ）が急行、ポーランドのヤーツェク・ズダノヴィッチとヤヌシュ・アダムスキも後を追った。彼らは応急のソリをしつらえてカッサルドをC1に収容した。最終的に飛来したヘリが負傷者をスカルドに運んだ。

ブラック・トゥース（6,718m）

バルトロ氷河右岸にあるムスターグ・タワーの前衛峰。ブナール谷でトシェⅢ峰の単独登山（後出）を終えたジーモン・メスナー（イタリア、29）がオーストリアのマルティン・ジーベラー(31)、フィリップ・ブルッガー(27)と３人で７月初めに入山、初登頂に成功した。

順応を兼ねた偵察で5,200mを往復したが、予定していた2016年ドイツ隊の試登ルートは危険性が高いとみて、1956年にムスターグ・タワーに第２登した

フランス隊が使ったヤングハズバンド氷河を経て南南西壁を登ることにした。急峻なブラックアイスの部分（WI5＋）に20mのロープを張ってBCに戻り、７月21日に攻撃を開始。しかし薄い氷と湿った軟雪にペースが上がらず、ビバークした翌朝も気温が十分に下がらなかったため、いったん下降した。好天が続きそうなので間を置かずに再挙。順応不足のブルッガーはBCに残り、メスナーとジーベラーだけで24日に出発した。コックが寝坊したのでスニッカーズとコカコーラを口にしただけで出発、1,200mを登って午後８時には前回のビバーク地に着いた。翌朝は４時20分に出て、時間を稼ぐために同時登攀。夜通し行動して夜明けには上部雪田に出た。そこは予想以上に急峻（55～60度）だったが、手持ちのスクリュー３本ではビレイしようがないので、そのまま登り続け、８時半には上部稜線に出た。この日は60mダウンクライムして二人が横になれるレッジを見つけてビバークした。26日朝４時、ビバーク装備を残して頂上へと向かう。傾斜の強い氷壁と岩塔（M5）を越え、雪庇の頂上に出たのは午後１時だった。下降は、墜落したとき相手を引き込まないためにロープは結び合わずダウンクライム。暗くなって壁の基部に着き、雪を溶かしてこの日初めて喉を潤すことができた。BCに帰ったのは午前３時だった。

リンク・サール（7,041m）

K7とK6の間にあるこのピークには、英国のジョナサン・グリフィスが執念を燃やし、チャラクサ氷河側から４回試みた末に2015年、アンディ・ハウスマンと北西壁から西峰（6938m）に達したものの、頂上まで約１kmの稜線を残した。一方、アメリカのスティーブ・スウェンソンはコンダス氷河側から、1979年に立正大学隊が試みた東面を狙ったが、印パ暫定国境（停戦ライン）に近いため、カシミール情勢の変動でなかなか許可が得られず、2000年と17年の２回試みたものの、約6,000mで敗退していた。

スウェンソンはベテランのマーク・リチー(61)を招き、前年行を共にしたグレアム・ジマーマン(33)、クリス・ライト(36)と挑み、３度目にしてついに初登頂を手に入れた。６月10日、カベリ氷河のBC（3,600m）に入り、７月４日、南東壁の基部にABC。高所順応に適した山が得られないので、ルートを上下することにした。攻撃は31日、ABCから標高差2,300mをアルパイン・スタイルで攻めた。5,100m、5,900m、6,200mとビバークするが、８月３日から２日間嵐に閉じ込められ、５日になって攻撃を再開。２回のビバークを経てついに頂上を陥れた。

アリソン・ピーク（5,100m）

コンダス氷河岩峰群のひとつ。2017年に東壁からリンク・サールを試みたトム・バラード(英)がイタリアのダニエーレ・ナルディ、ミケーレ・フォッキと下部スラブに新ルート（950m、Ⅵ＋）を拓き、頭上にそびえるこのピークに1995年にK2で亡くなった母（アリソン・ハーグリーヴズ）の名を付けた。

マウリツィオ・ジョルダーニ率いるイタリア隊４人は知られざる小ピークの岩壁を求めて入山、７月31日にアリソン・ピーク南稜を登った。マッテオ・デッラ・ボルデッラとマッシモ・ファレッティによるもので、２日間でルートを完登、頂上には行かず、ひと晩かけて下降した。ルート名はMa-Ma Natura。ボルトを１本も使わず、なにも残置しなかったことを表わす命名だという。

シェルピ・カンリⅡ峰（7,100m）

リンク・サールの東、コンダス氷河左岸に7,380mのシェルピ・カンリがある。主峰は1976年に神戸大学隊によって初登頂されたが、同隊はその２年前に

偵察・試登隊を派遣、P36氷河との分水嶺に達して東からのルートをさぐっていた。アメリカのジャクソン・マーヴェル、マット・コーネル、カート・ロスは８月にこの偵察ルート経由で、比較的容易な南東稜からⅡ峰に初登頂した。BC建設後数か所の前進キャンプへ荷揚げを繰り返し、往復７日間で登山を終えた。

タフルタム（6,650m）

スロヴェニアのヤネズ・スヴォリシャクはサラ・ヤクリッチと西稜をアルパイン・スタイルで狙っていたが、７月15日、BCで就寝中に亡くなった。スヴォリシャク(25)は2012年から17年までアイスクライミングのワールドカップに参戦し、16年にザースフェー（スイス）で第２位、その翌週にラーベンシュタイン（イタリア）で行なわれたヨーロッパ選手権で優勝した。ここ３年は、コーチやルートセッターを務める傍らアルピニズムに傾倒、M15のSaphiraを初登したほかモン・ブランのイノミナータ山稜やマッターホルン北壁を１日で登攀、今年前半にはアラスカのレヴェレーション山群で５つの初登攀を記録していた。

ラカポシ（7,788m）

フンザの高峰として知られるが、1938年英国ペアの北西稜試登に始まる長い登攀史のなかでまだ８回しか登られておらず、拓かれたルートも３本に過ぎない。アプローチが最短１時間という恵まれた位置にありながらこの不人気ぶりは、容易な通常ルートがひとつもないことにもよるだろう。

平出和也(40)と中島健郎(34)、２年前にシスパーレ北東壁を登ってピオレドールに輝いたペアが、南面ダニョール谷から南壁を初登攀した。本来の目標はティリチ・ミールだったが、許可の可能性がなくなったため、待機中に偵察したラカポシ南壁に挑むことにして、６月16日BC（3,660m）に入った。雨がちの天候をやり過ごして27日に出発。初日に標高差1,500m、２日目に1,000mをかせいで３日目に南東稜に出た。6,800mでビバークした翌日から２日間は降雪で停滞し、７月２日12時、頂上に立った。

チャシュキンⅠ峰（6,035m）

シムシャール谷のピーク。ティコ・ギャングリー(米)が６月20日に初登頂し、頂上からスキー滑降した。ABCから往復11時間（登り９時間、下降２時間）を要し、登攀ルートはSteeze Matters（900m ED、5.11c M4+ 85°）と命名。ロープソロのつもりでギアを携行したが、結局使わずに済み、頂上までフリーソロした。下降路は60度以上の急斜面に採った。

ナンガ・パルバット（8,126m）

イタリアのダニエーレ・ナルディ(42)は冬のナンガ・パルバットに４回、挑んでおり、2013年にフランス女性エリザベート・ルヴォルと西壁ママリー・リブの6,450mに達した。15年にはスペインのアレハンドロ・チコン、パキスタンのムハンマド・アリ・サドパラと西壁通常ルートで7,850mまで迫ったが、サドパラが肺水腫に陥ったため引き返した。以前のパートナーだったルヴォルは前年、ポーランドのトマシュ・マツキェヴィッチと冬季第２登を果たしたが、彼は帰途7,200mで動けなくなり、ルヴォルひとりが6,000mまで下降。要請に応じてK2から駆けつけたポーランドのデニス・ウルブコとアダム・ビエレツキに救出された。

ママリー・リブに執念を燃やすナルディは今回、英国のトム・バラード(30)をパートナーに、１月早々から入山。しかし、大雪に悩まされて6,400mから先へ進めず、２月下旬、攻撃に踏み切った。しかし、

二人は２月24日6,400mに達したという連絡をよこしたまま消息を絶ち、３月に行なわれた捜索で、ロープを結び合ったまま5,900m付近に倒れているのが見つかった。K2に挑戦中だったチコンは急遽捜索に駆けつけたが、印パ国境で起きたインド空軍機撃墜事件のあおりでヘリの手配が遅れたうえ、現場は雪崩の危険が高くて近づけず、３月９日に望遠レンズで撮った写真から、着衣の色から二人の遺体であることを確認するに留まった。

トシェⅢ峰（6,200m）

ナンガ・パルバットの南西18kmのブナール谷にあり、地元ではゲシュト・ピークと呼ばれている未踏峰。ラインホルト・メスナー(74)が息子のジーモンとギュンター・グローベル、ロベルト・ノイマイヤーの4人で映画を撮るために入山した。しかし悪天候で諦め、ジーモンだけが６月29日に単独で攻撃。BCから５時間半で初登頂し、その日のうちに帰着した。

メルヴィン・ジョーンズ・ピーク（5,800m）

ライオンズクラブ創始者の名前が付いたヒンズー・クシュ、イシュコマン谷のピーク。イタリアのタルチジオ・ベッロ以下４人がパキスタン人３人と登山中、６月20日雪崩に襲われ、後者の一人イミティアズが行方不明、他の数人も負傷した。翌日、300km離れたスカルドの基地からヘリが飛来し、６人を救出した。

コヨ・ゾム（6,872m）

ヒンズー・ラージの最高峰。６人の英国隊が９月に二つのルートに分かれて頂上を試みた。トム・リヴィングストンとアリー・スウィントンは西壁を５日間で登って９月28日に登頂。1968年に初登頂したオーストリア隊のルート（東面）へと下降した。ところが、ペチュス氷河でビバークした翌日、スウィントンが5,900m付近のクレバスに転落、20m落ちて止まったものの、頭部を負傷した。スウィントンを引き上げたリヴィングストンからの要請でヘリが飛んだが、現場の標高が誤って低く伝えられたので旧式の機体が用意されたため届かない。新型ヘリに切り替えて翌日昼ごろ到着。おりからの強風で６回着陸をやりなおした末に二人を救出した。ジョン・クルック、ウィル・シム、ウィスディーン・ホーソンは北東バットレスに向かったものの５日間で登攀を切り上げ、無事BCに帰った。

リシュト・ピーク（5,960m）

フランスのシモン・ヴェルフランジェが、４月から５月にオーレリヤン・ヴェシエール、ピエリック・フィーヌ、アントワーヌ・ローイェと共にアフガン国境を訪れ、ヤルフーン谷に入った。80年代に開放されていたこの谷は紛争で閉ざされていたが、今回ひさびさに入域が許可された。3,000mのBCからスキーで６日間リシュト氷河を遡り、源頭のコル（5,600m）に達してから滑降を楽しんだ。思わしくない天候を下流でボルダリングしてやり過ごし、BCで２日間休養してから再び氷河を遡って目を付けていた無名峰を目ざし、前回６日間を要したところを２日間で走破、5,400mに戻った。５月22日、標高差500mのラインを登り、90度の氷（５級）に続いてM6のピッチを克服すると頂稜の下に出た。雪の状態は最悪だが、なんとか突破して頂上に到着。GPSと気圧計は5,960mを示していた。締めは付近のゴルジュの側壁で２本の初登攀を手に入れた。

５　アルプス

アイガー北壁

スイスのユリアン・ツァンカー(28)が２月24日に

北壁オリジナル・ルートを登攀中に墜死した。トビアス・ズッターと組んだ彼は、ランペを抜けて氷のチムニーをリードしていたときに20mほど転落したらしい。異常を感じてロープをフィックスしたズッターがコーナーを回って呼びかけてみても、ぶら下がったまま反応しなかったという。ツァンカーは5.13クライマーだが、氷やアルパインの経験もあった。2014年にはヴェッターホルン北壁で初のBASEジャンプに成功、2017年にはトーマス・フーバー（独）、シュテファン・ジークリスト（スイス）と、セロ・キシュトワール北西壁でHar Har Mahadev（Ⅶ、A3+ 6b M6）を初登していた。

スイス女性ニナ・カプレツ（32）がLa Vida es Silbarを20時間で登った。グラン・カピュサンのプティ・ルート（8b）を11時間で再登した彼女は、初めて挑むアイガーの感触をつかむため、まず地元のロジェ・シェーリとGelber Engelを登攀。数日後アイメリチ・クルーエと組んで登ったもの。1998年から99年にかけてダニエル・アンカーとシュテファン・ジークリストが拓いた初期のモダン・アルパインルートで、最も傾斜のきつい「赤い岩壁」を900mにわたって直上する27ピッチのライン。2003年にウエリ・シュテックがフリー化、16年にシェーリがニュージーランドのメイヤン・スミス＝ゴバトと第２登したが、落石で核心部が7c から7c+ に格上げされていた。今回カプレツは全ピッチ、クルーエは２ピッチを除いてフリーで登ったが、核心と上部の7bでは数回のトライを要した。二人は頂稜まで6aと6bのピッチを残す地点まで20時間で達したが、午後10時になっていたためチェコ・ピラーの基部まで下降、そこでビバークした。

La Vida es Silbarが７月23日、シェーリとセアン・ヴィラヌエヴァ（ベルギー）によって１日でレッドポイントされた。16年の第２登以来ワンデイを狙っていたシェーリは全27ピッチのうち困難な部分をすべてリード、他のピッチは交互にリードした。二人はチェコ・ピラーの頭に出てから頂上まで足を延ばし、南壁でビバークした。

スイスのロジェ・シェーリが自身50回目のアイガー完登を果たした。日本直登ルートやハーリンダイレクトのフリー化、メタノイア第２登など数々の記録を持つシェーリは、７月23日にベルギーのセアン・ヴィラヌエヴァとLa Vida es Silbarのワンデイフリーに成功後、リュシアン・カヴィーツェルとLocherspielを再登してパラグライダーで滑空、50完登を祝った。さらに９月にはヴィラヌエヴァ、ニナ・カプレツと３人でMerci La Vieを拓いている。

同じころ、アイガーにはなじみの深いロベルト・ヤスパーもパタゴニア行の準備を兼ねてロープソロで新ルートを初登攀、Meltdown（7a+）と名付けた。この19年間北壁を観察してきた彼は近年、壁に張りついた氷田がまったく消え去るような夏に、地球温暖化の影響を強く感じるという。

グラン・ピリエ・ダングル

プトレイ大岩稜東壁のディヴィーヌ・プロヴィダンスは、1984年８月にパトリック・ギャバルーとフランソワ・マルジニによって登られた。モン・ブラン山群随一のルートという評判がありながら、冬季登攀は意外に少ない。ロベルト・ブレッサン、サヴェリオ・オッキ、パオロ・タマニーニが大岩稜の頭まで登ったのは92年１月のこと。モン・ブラン頂上までの全長はその年の12月にブレンダン・マーフィとデイブ・ウィルズによって果たされた。フランスのイグザヴィエ・カイロルとシモン・ヴェルフランジェは２月17日に取り付き、19日に完登、21日にモン・ブランを越えて下山した。

エギーユ・ド・ラ・ブレンヴァ

400mの標高差を持つ東壁では、アルノー・クラヴェルやマッシモ・ファリーナらによって岩のルートが拓かれてきた。最近はアイスクライミングの対象としても注目されている。東壁で初めて氷が登られたのは2000年代前半のことで、エーツィオ・マルリエとファリーナによってStop the War（300m、6c WI5）が拓かれた。最近では16年にジャンパオロ・ドゥクリとマルリエがMillion Reasons（400m、WI5 M7）とSole（400m、WI5 M7）を初登している。

エギーユ・ノワール・ド・プトレイ

英国のマット・ヘリカーとジョン・ブレイシーは４月14日、プトレイのノワール針峰北東壁でミックスの新ルートを登った。クールマイユールを早朝に発った二人は、前夜の寒気でよく締まった雪を踏んでアプローチ、ブレンヴァ氷河舌端の上部にある取付きに達した。数日前、別の目標に向かったときは雪崩の危険で中止していたので、幸先よいスタートだった。登りだしてすぐボルトを見つけたが、これは2014年にこのラインを試みたアンドレア・プラットが打ったものだった。氷雪の詰まった狭い溝を同時登攀で進むと、ボルトの列は３ピッチで途切れていた。そこからの２ピッチも同時登攀し、雪田を横切って次の溝に移って薄い氷をたどると、氷は解けだして水流となる。ここから手ごたえのある登攀になり、オーバーハングとオフウィズス、コーナー、スラブ、雪のマッシュルームを４ピッチ登る。これらをつなぐ薄い氷のピッチではプロテクションを取ることが難しく、それはこの溝が終わるまで続いた。ルート名はPast Da Pesto（450m、M7）。下降はボルトを追加することなく往路を降りた。

エギーユ・ド・ラモーネ（3,586m）

スイス＝フランス国境にあり、知名度ではモン・ブラン山群の巨峰の影に隠れているが、その東壁は良質の花崗岩で構成されている。スイスのジーモン・シャテランとシルヴァン・シュープバッハはパタゴニア行を中止した代わりに、この東壁に新たなミックスルートを拓いた。２月27日の昼ごろ取付いた二人だったが、最初のピッチでフォローしていたシュープバッハがスリップし、親指をひねった。次のピッチではビレイ中顔面に落氷を受け、ぎしぎしする前歯のまま「これは冒険だ」と言い聞かせながら、登り続けた。いささか不快な夜を過ごした翌日は問題もなく、L’accciden-telle et l’accidenteを完成し、堅雪に覆われた北壁を下降した。

シェーレネン・ゴルジュ

スイスのダニ・アーノルトとマルティン・エヒザーが、ゴルジュの西岸で９ピッチのミックスルートを初登した。二人は昨年一度トライしたが、わずか２ピッチで敗退を喫した。極度にコンパクトな岩がピトンなどのトラッドギアを受け付けないと思い知らされたためだった。ことしは１月に、二人のパートナーを伴って再度挑戦し、必要な個所にはボルトを打つなどし、６日間かけてルートを完成した。ルート名はUristier Schollenen（WI6+ M8）。アイガーやマッターホルン、グランド・ジョラスのスピード登攀で知られるアーノルトだが、2012年のThe Hurting in Scotland再登が示すように、テクニカルなルートにも適性があることを示した。

エッツタール・アルプス

４月にカナディアン・ロッキーのハウズ・ピークで雪崩の犠牲になったハンスイェルク・アウアー（オーストリア、35）が直前の２月に３本のアイスルート

を開拓し、ローフェレヴァント（3,354m）北西壁の単独初登攀にも成功した。彼はまずルーカス・リムルとSevlstauda（120m、WI5+ M4 A1）を初登し、エレファンテンヴァントのMammut Lexを初登。2015年にアウアー自身が初登し、その後だれも登っていないElfenbeinのすぐ右手をたどるラインである。この２ルートはいずれも１日で登り切ったが、アーシュバッハ村の上方にそびえるゲーゲンヴィントは異なる展開となった。アウアーが４年前に試みて膝を負傷したルートで、今回はアレックス・ブリュメルと再挑戦したが、出だしの２ピッチで断念。１週間後にトビアス・ホルツクネヒトと残りの3、4ピッチを登り、Gegenwind（90m、WI5+ M8）とした。アウアーはさらに２月27日、ローフェレヴァントを目ざして出発、北西壁（標高差500m）の新ルートをソロした。ビバーク１回を見込んでいたが、状態がよかったので登り続け、2017年の冬季縦走ですでに踏んでいた頂に再び立った。

ニーデラー・プリヤークト（3,056m）

プリヤークトは東チロルのショーバー山群にある双耳峰。ハイカーには人気があるものの、クライマーの興味を引くことはあまりなかった。2000年代の初めにイジドル・ポッペラーが低いほうのピーク、ニーデラー・プリヤークトの北壁をソロしたが、彼のルートは再登されていなかった。ガイドとして何度もこの山のクラシックルートを登ってきたヴィットリオ・メッシーニは、頂へのダイレクトルートを模索したが、夏季は岩が苔に覆われており、冬を待つしかないと考えた。過去３年のシーズンは雪付きが少なかったり、氷が十分発達していなかったりで、挑戦に至らなかった。昨年12月中旬、ジーモン・ギートルとトライすることに決めたのは、前の週に大雨が降ったので上部の状態が好転していると踏んだからだった。アプローチから見た壁は、遠目に見ても新雪と堅雪に覆われて、期待できそうだった。雪と氷を10ピッチで雪田に出、さらにミックス部をたどって頂上に出たのは夕方の６時だった。最上部は、10年に一度と言っていいくらい、予期しなかった好コンディションだった。ルートはSintflut-Deluge（M6/WI5 R、500m）と命名された。

エギーユ・デュ・ミディ

コスミク山稜、3800mの高みにあるディジタル・クラック（5.13b/c）は、ティエリ・ルノーとアラン・ゲルザンによってフリー化され、世界最高所の8a+として話題になった。チェコとポーランドの女性、ルシー・フロゾヴァとオーラ・プシビシュが８月、それぞれ別の機会に登った。フロゾヴァは氷とミックスを主体としており、M14を登った最初の女性。16年にはアメリカでM15- のSaphilaに成功した。ディジタル・クラックには写真を見て挑戦したいと思ったという。最初は寒さと高度で１ピッチ目（6c）さえ登れなかったが、高所に順化してからは陽光も差してきて完登に至った。中国に住むプシビシュは5.14cを登り、国内各地でトラッドやボルトルートを経験している。彼女も、フロゾヴァから間をおかずに成功した。

ユングフラウ

ロジェ・シェーリは７月、シュテファン・ジークリストと、西壁で雪のつかない岩場（ロートブレット）をたどる９ピッチの新ルートを拓いた。１年前に試みたラインで、今回は１日目に核心の５ピッチ目、翌日は６ピッチ目のオーバーハング（8a+）をレッドポイントした。ルート名はSilberrucken（シルバーバック）。

ビショフスミュッツェ

東部チロルのスカイラインを描く岩峰群シュピッツコーフェルテュルメのひとつ。雨がちの春がこの山の北壁を初め、山群各所に氷の発達をうながした。ヴィットリオ・メッシーニ、マティアス・ヴルツァー、ハンス・ツレーブルは別個に偵察し、コンディションを確認して北壁に取り付いた。小さなガリーとチムニーから始まった登攀は、中間部のトラバースでプロテクションが懸念されたが、多少のランナウトを含めてうまく行き、1940年夏に拓かれた北壁ダイレクトに合流し、ランペを伝って前衛峰に到達、南峰を回り込むと頂上だった。ルート名はKitchen Window（500m M5/6）、ツレーブルの自宅キッチンからじかに見えるからだという。

ヴィルダーカイザー

アレクサンダー・フーバーとグイド・ウンターヴルツァッハーが2013年にマウクシュピッツェに見つけてトライしたラインを５年間の中断を経た10月15日に完成した。中断の理由は、期待したほどの魅力を感じなかったことと、フーバーのロングフォールを止めたときにウンターヴルツァッハーが手首を負傷したことによる。ルート名はKoasabluad（7ピッチ、8b+）。

スコットランドのロビー・フィリップスが「アルプスのマルチピッチ（8b+）三部作」に成功した。トーマス・フーバーのEnd of Silence（ベルヒテスガーデン）、ベアート・カマーランダーのSilbergeier（レーティコン）、シュテファン・グロヴァッツのDes Kaisers neue Kleider（ヴィルダーカイザー）の３本で、これまでに2001年のグロヴァッツ、05年のハラルト・ベルガー、13年のバルバラ・ツァンガール（女性初登）らが完登している。フィリップスは８月下旬、最後の１本Des Kaisers…に成功したもの。

ピッツォ・バディレ

46年前の1973年、東北東ピラーに拓かれたルートがVia Nardella。ダニエーレ・チャパ、ジュリオ・マルティネッリ、ティツィアーノ・ナルデッラ、エーリオ・スカナベッリの４人が初登攀したものである。スイスのマルセル・シェンクとダーフィット・ヘフティがフリー化を試み、２ピッチを除きすべてオンサイトした。この２ピッチはセカンドがフリーで登っている。

チマ・グランデ

スイスのダニ・アーノルトが９月５日、コミチ＝ディマイ・ルート（550m）を46分30秒でフリーソロした。クリストフ・ハインツが2014年に記録した48分を更新したもの。

ポーランドのヤーツェク・マトゥシェクとウカシュ・ドゥデクが北壁に新ルートを拓いた。ここ数年、彼らのアルプスツアーでは、先述した「マルチピッチ8b+三部作」を初めとする定評あるルートを次々に再登してきたが、自分たちの１本を拓いたことはまだなかった。2017年にマルモラーダから始めた目標捜しはしかし、思うような壁がなかなか見つからなかった。そんなとき、1980年に同国人のピョトル・エーデルマンとヤン・フィヤルコフスキがチマ・グランデ北壁の右側に拓いたラインが再登されていないことを知った。いざ行ってみるとルートは濡れていたものの、さらに右手の垂壁はドライで、新ルートを引けるスペースもあることが分かった。８月のドロミテは寒く、気温は10℃を上回ることはなかった。そんななか６ピッチを稼いで、嵐のためそこで中断。翌年に残りの６ピッチを追加した。そのうちジーモン・ギートル、トーマス・フーバー、ライナー・トレプテがラ・ストラーダを初めて再登した。マトゥシェクとドゥデクがPremiereを完登したのは８月15

日のことだった。

パラ・ディ・サン・ルカーノ

ベルギーのシーベ・ヴァンヘーとダヴィド・ルデュクが18年10月、テルツァ・パーラ（2,355m）南壁にSpazzacamino（1,500m 7a）を拓いた。壁の途中で１回、頂上でもう１回のビバークを要した。

６　グリーンランド

ナルマソルトック

イタリアのフェデリカ・ミンゴーラとエドアルド・サッカーロがターセルミウトフィヨルドに入り、ナルマソルトック中央ピラーにLa Cura（7b+ A2）を拓いた。初めは、ナルマソルトックかウラメルトルスアックの岩壁を目標にしていたが、期待したほど固くはなさそうで、クリーンでもなかった。と言うより不安定で危険だった。クラックはしっかりしているが、場所によっては苔に覆われている始末。

１日歩いて、ハーフドームと呼ばれている岩峰を見に行く。そのとき見たのが、BCから見えないナルマソルトックの南壁だった。写真に撮り、右手へジグザグを切って頂上の右に出るラインを想定した。誰の目にも明らかなので以前登られていると思ったが、手持ちのトポを調べ、他のクライマーの意見も聞くと、どうやら未踏のようだった。懸念された天候は保ち、８日間に４回の攻撃の末、南壁の頭に出たのは８月16日だった。嵐が１週間続いて気温が下がり、最後の仕上げは登攀１日とビバーク２晩で終わった。

ウラメルトルスアック

グリーンランド南西部の岩峰。ブラジルのビニシウス・トデロとマルコス・コスタが８月にターセルミウト・フィヨルドを訪れ、西壁の有名なモビーディック（1,200m、7c+ A1）を再登、さらに新ルートも付け加えた。

飛行機を３回乗り継ぎ、ボートで４日、さらに４日間の歩きで入山した一行は、まずナルマソルトックで600mに及ぶ新ルートを試みた。しかし、取付きから250mであえなく敗退、ウラメルストックのモビーディック再登に目標を変えた。1994年にクルト・アルベルト、ベン・マスターソン、ディディ・ランゲン、ハンスマルティン・ゲッツ、ヴァルター・オーベルゴルザー、ヘルムート・ガルギッター、シュテファン・グロヴァッツの国際チームが登ったルートである。予報では２日間の晴天しか保証されていなかったのでその機会に登るつもりだったが、頂上に立ったのは２日目の深夜12時。午前４時半にポータレッジに戻り、しばらく眠っているうち嵐が爆発し、以後36時間にわたって閉じ込められる結果となった。

次の目標は、同じ岩峰に新ルートを拓くことだ。７月26日に取り付いてみると、３ピッチで２か所の古いアンカーを見つけた。しかし、これは懸垂下降用だったらしく、下部のコーナーは繁茂した草に覆われて登った形跡は見当たらなかった。６ピッチ目から先にはナチュラル・プロテクションで行けそうなピッチが見当たらないので、モビーディックを５ピッチたどり、450mでビバークできそうなレッジに出た。その先は左へ出て、マジック・トロンブロンを３ピッチたどってから新ルートに戻った。続く８ピッチは小さなルーフとアレートが続き、下から認めていたクラック・システムに達した。フィンガーからハンド、最後は50mのオフウィズスをフリーで越えるのは、このルートのハイライトだった。23、24ピッチ目は再びマジック・トロンブロンをたどって小さなレッジへ。25ピッチ目のアレート（8a/8a+）はナチュラル・プロテクションが使えず、７本のボルトを要した。アレートの先は、さらに２ピッチで

頂上だった。

合計12日間の登攀は４回の攻撃で克服されたが、25、26ピッチ目はフリーで行けなかった。残る日数でフリー化を狙ったが天候が許さず、600m上に残したギアを回収するために古いルートを登り、頂上から懸垂しなければならなかった。ルート名は、地元イヌイットの言葉で「ありがとう」を意味するQujanaq（1,000m、8a？）。

７　アラスカ／カナダ

ハウズ・ピーク（3,295m）

オーストリアのダーフィット・ラマ(28)とハンス イェルク・アウアー(35)がアメリカのジェス・ロスケリー(36)と組んで、東壁M-16（Ⅵ、WI7+ A2）を目ざしたが、登頂に成功した４月16日、下降中に雪崩を受けて亡くなった。20年前、スティーブ・ハウスがバリー・ブランチャード、スコット・バックスと登ったもので、その後再登した者はいなかった。

３人は事前に、マウント・アンドロメダ（3,450m）のアンドロメダ・ストレイン、スタンリー・ヘッドウォールのネメシスといったクラシック・ルートを登ってから取付いた。17日に消息が途絶えたため、カナダの公園当局が捜索ヘリを飛ばしたが、悪天候と雪崩の危険から、遭難現場と目される巨大な雪崩跡にビーコンを投下してマークすることしかできなかった。天候が回復した20日と21日、改めて捜索が行なわれ、捜索犬を含む一行が現場に到着、遺体を確認した。このとき回収されたロスケリーの携帯電話には、３人の頂上ショットが保存されており、16日の12時半にそろって登頂していたことが確認された。

マウント・フェイ（3,235m）

４月２日～３日、ブレット・ハリントン(米)、ルカ・リンディッチ（スロヴェニア)、イネス・パペルト（独）が東壁に新ルートを拓いた。リンディッチは2016年に故マルク＝アンドレ・ルクレール（カナダ）とここを試みて、悪条件に撃退されていた。ルクレールの死後、リンディッチは二人の女性を伴って再度この壁に挑んだ。リンディッチとパペルトは３月下旬カナダに飛んで、故ルクレールのパートナーだったハリントンと合流、２日の早朝から登りはじめた。1984年に、バリー・ブランチャードとデイブ・チーズモンド、カール・トビンが右へトラバースして避けた垂直の氷柱と急峻な雪壁をダイレクトに登り、頂上の250m下でビバーク。翌日は急峻で脆いヘッドウォールと格闘の末、フェイ東壁の全長1,100mをたどる初めてのルートを完登した。ルート名はThe Sound of Silence（M8 WI5)。

マウント・ディッキー（2,909m）

ルース・ゴルジュ最奥部に位置するディッキー東壁には、故ウエリ・シュテック（スイス）が2002年３月にショーン・イーストンと拓いたBlood from the Stone（1,500m、A1 M7+ WI6+X）がある。カナダのアラン・ルソーは、ジャクソン・マーヴェルとその第２登を狙って４月初めに入山した。アラスカ最難の１本ともいわれるこのルートはめったに形成されることがなく、今回も氷が断続した状態だった。

４月３日、アプローチの途中、どのコーナー・システムをルートに採るか話し合っていたにもかかわらず、マーヴェルがラインを誤るが、振り子トラバースからM6+、M7の２ピッチを登って、ビバークを予定した雪田に出ることができた。２日目はオリジナルとは異なったラインを選び、振り子で一連のチムニーに入り、急峻な雪とアルパインアイスを経て２回目のビバーク。用意したタープだけでチリ雪崩を

防ぐこともできず、濡れそぼる一夜となった。翌日は早々に出て、頂上直下の深い雪に出合うまで快適な登攀が続き、腰まで潜る雪の中を頂上に達した。ルート名はRuth Gorge Grinder（1,520m、AI6+ M7）。

マウント・バリル（2,332m）

ニュージーランドのダニエル・ジョフ、キム・ラディゲス、アラステア・マクドウェルがオーストラリアのジョン・プライスを加えた４人で東壁コブラ・ピラーに350mのバリエーションを付け加えた。当初キチャトナ山群を狙って入山したが評判どおりの悪天候のため１週間で断念、ルース氷河に移った。1991年にジム・ドニーニとジャック・タックルが登った東壁コブラ・ピラー（2005年にライアン・ネルソンとジャレッド・オグデンがフリー化）に取り付いた。３ピッチ目を終えたところで右手へ出て、350mにわたって新しいラインを採った。オフウィズスを含むみごとなクラックを追っていくと再びコブラ・クラックに合流し、３ピッチでピラーの頭に出て、頂上に達した。ルート名はKing Cobra（550m 5.11）とした。

カナディアン・ロッキーズ

アメリカのネイサン・ハドリーが８月にロッキーを数週間訪れ、短期間のうちにレイク・ルイーズのThe Path（5.14 R）ほか、ロッキーのマルチピッチ三部作と呼ばれている、Castles in the Sky（5.14）、The Shining Uncut（5.14）、Blue Jeans Direct（5.14）をすべて完登した。

８　米国本土

ヨセミテ、トゥオラミ

前年秋に弱冠15歳でノーズのフリーに成功して世界を驚かせたコナー・ハーソン(16)が９月、トゥオラミ・メドウズのメドリコット・ドームにあるPeace（5.13d）に成功した。ロン・カウクが初登したこのルートは、磨かれた美しい花崗岩に散らばる小さなノブ状ホールドをデリケートなムーブでつなげていく、トゥオラミならではのフェースルート。近くにグラウンドアップで初登され、ランナウトすることで有名なバーカー・イェリアン（5.11）があるが、こちらはラペルボルトの開拓手法が採られたため、ランナウトを強いられることはない。

ポーランドのマレク・ラガノヴィッツが10月に、エル・キャピタンのBorn Under a Bad Signのソロに成功した。1979年にビル・プライスとティム・ワシックによって登られたA5ルートで、ラス・ウォーリングとウォルト・シプリーによって再登されるまで７年間を要した。ラガノヴィッツは彼らの報告に触発されて挑戦、事前のフィックスなし、13時間で単独初登した。

アレックス・オノルドとトミー・コールドウェルが11月上旬、エル・キャピタンに新しいフリールートを完成させた。エイドルートのNew Dawnにほぼ沿うかたちで（下半分はノーズとDawn Wallの間に当たる）フリー化されたようだ。これは今から18年前、英国のレオ・ホールディングが、壁の半分ほどの高さにあるエルキャップ・タワーまでをトライし、Passage to Freedomと呼んだのとほぼ同じライン。このときホールディングは核心のひとつとなる横っ飛びランジ・ムーブには成功していたが、不可能と思われたブランク・セクションは、A0で通過していた。ちなみに、そのA0で使うホールドはアルファロメオのエンブレムをボルト止めしたもので、まだエル・キャピタンのフリー化が一般的ではなかった当時の遊び心が垣間見られる。二人はそのセクションを別のラインから通過してフリー化したようだ。

約３週間にわたったトライにはケヴィン・ジョージソンも加わっていたということで、まさにエル・キャップフリーの最強トリオによる新ルート完成と言えよう。

10　ギアナ高地

ロライマ（2,810m）

英国のレオ・ホールディングがガイアナ側北壁の突出部、高さ600mの「舳先」にフリーで新ルートを拓くべく入山した。メンバーはアナ・テイラー、ウィルソン・カットバース、ワルド・イザリントン。11月初めに1ｔ近い装備と物資を山麓の密林地帯に空中投下し、荷物を回収しながらBCに向けてアプローチすると、北壁基部に前進キャンプを設けた。「舳先」の下部４ピッチは1973年英国隊（ヘイミシュ・マッキネス、ジョー・ブラウン、ドン・ウィランズら）の初登ルートをたどり、５ピッチ目から左へ出て新ルートに入る。初登者たち同様、濃密な植生と急峻な岩と闘い、12月２日、頂上台地に抜けた。この時点でフリー化できなかった１ピッチは、ホールディングが頂上から懸垂下降してフリーで登っている。

9　ペルー・アンデス

ワンドイ・ノルテ（6,360m）

春のネパールでチャムラン北西壁を初登してから３か月、チェコのマレク・ホレチェクが南米に飛び、ブランカ山群のワンドイ北峰東壁に新ルートを拓いた。1976年ポーランド・ルートの右手をたどるもので、ビバーク２回、正味55時間を要した。ルート名はBoys 1970（1,200m M6 WI6）。その年５月にアンカシュ県を襲った大地震でワスカラン北峰の氷壁が崩落、雪崩と土石流は下流の村まで達して多くの犠牲を生んだ。おりから挑戦中のチェコ隊BCも呑み込まれ、14人全員が亡くなった。命名はその悲劇を悼むもの。

セロ・トルニージョ（4,900m）ほか

スペイン（バスク）のエネコとイケルのポウ兄弟がマニュ・ポンセ、アレックス・エストラーダと７月をブランカ山群南東部で過ごし、岩壁に新ルートを求めた。まず、３時間のアプローチでトルニージョの4,500m地点にBCを置き、７月２日に北壁を６時間で初登、Burrito Chin de los Andes（6b）とした。続いてワンカプンタ（4,670m）南壁の石灰岩のスラブ（470m）を２日間で登ってCabeza Clava（6c+）としたが、南半球の南壁は日が差さず、０度からマイナス５度の寒気は指先に応えたという。その後、カション西峰（5,686m）北壁でAndean Kingdom（7a+ 800m）、ジャカ溪谷でAupa-Gesteiz!（5ピッチ160m）を拓いて実り多い遠征を終えた。

アレキパ

フランス女性シャーロット・ドゥリフとアメリカのジョシュ・ラーソンが９月に、ペルー南部のアレキパ地方にあるクントゥル・サジャナ（Kuntur Sayana）に、5.13台が連続する７ピッチのルートを拓いた。取り付きの標高は4000mを越えており、5.13+、5.13-、5.13-、5.13-、5.12+ からなるピッチが連続するという。高度とフリーには向かない気温という条件を考えると極めて異例で過酷なマルチピッチと言えよう。

10　パタゴニア2018/19

2018/19年シーズンは3季連続で悪天候がクライマーたちを悩ませた。2012年、15年、16年と続いた好天も去って昔のパタゴニアに戻り、好天が持続したのはシーズン初めの11月とシーズン末期の３月から４月にしかなかった。このシーズンは、パタゴニアに

は珍しく遭難が相次いだ。フィッツロイでは３人が亡くなり、セロ・ソロでも１人が死亡。このほか３つの救助活動が行なわれた。遭難のおもな原因は、悪天候による待機に耐えきれなかったパーティーが、たまさか訪れた短い好天期間に攻撃を焦った結果だと思われる。フィッツロイの遭難（２隊）は、１月中旬の同じ日に起きた。両隊とも予報を軽視したことは明らかで、通信手段を欠いていたために救助の機会も失われてしまった。

フィッツロイ（3,405m）

アメリカのジム・レイノルズ(25)が３月21日、北西壁アファナシエフ・ルートを、登下降ともフリーソロで往復した。フィッツロイのフリーソロは2002年に故ディーン・ポッターがスーパー・カナレータから行なっているが、下りは懸垂下降しているので、往復ともロープを使わずに成功したのはレイノルズが初めて。YOSAR（ヨセミテ公園捜索・救助隊）に所属するレイノルズは2017年にブラッド・ゴーブライトとエル・キャピタンのノーズを登り、当時のスピード記録を樹立していたが、パタゴニアを訪れたのは今回が初めてだった。

初めの２か月ほどは、仲間といくつかのルートを登ったが、フリーソロへの自信を抱くと、３月９日にラファエル・フアレス（2,450m）西稜のFilo Oeste（5.11a）を登って英＝米ルート（5.11b）を下降、２日後にもサン・テグジュペリ（2,558m）のChiaro di Luna（5.11a）を登って北壁のKearney=Harrington（5.10b）を降りた。後者は以前、アメリカ女性ブレット・ハリントンとカナダのマルク＝アンドレ・ルクレールがフリーソロしているが、いずれも帰途は懸垂下降しているので、ロープを使うことなく下降したのはレイノルズが初めてだった。

セロ・トーレ（3,102m）

ボルトフリーのルートに生まれ変わった南東稜は、フランスのレオ・ビーヨンとマックス・ボニオ、スロヴァキアの両チームが登って第７、８登を記録した。フランス・ペアは、フィッツロイのエル・コラソンも再登（第５登）している。

アルゼンチンのホルヘ・アッカーマンとトーマス・アギーロ、イタリアのコッラ・ペシェは北壁の左手に新ルートを試みたが、23ピッチ（うち９ピッチが北壁）を登って、13年にアギーロが到達したヘッドウォール基部から３ピッチ延ばしたところで敗退した。

トーレ・エガー（2,850m）

エルマンノ・サルヴァテッラら４人のイタリア隊が、急峻な西壁中央部のブランクを埋める新ルートに４回目の挑戦を行なった。ポータレッジでビバークしながら21日間を過ごしたが、結局３分の２を登ったところで物資が尽きた。

東壁では、ブレット・ハリントンとクエンティン・ロバーツが、タイタニックの出だし３ピッチから左手に出て、中間部の雪田で再合流するバリエーションを試みた。故マルク＝アンドレ・ルクレールが生前示唆していたラインで、二人はMarc-Andre's Visionのルート名で再び挑戦する予定だという（ハリントンとロバーツは2020年２月６日から９日に成功した）。

アグハ・ポワンスノ（3,002m）

ダニエル・アンカーとミシェル・ピオラが1989年に拓いたルート、Patagonicos Desperados（550m 6c A3）がベルギーのシーベ・ヴァンヘーによってフリー初登された（7a+）。それから１週間後にはレオナルド・ゲザがオンサイトしている。

エル・モチョ（1,953m）

オンドレイ・フゼルカとヨーゼフ・クリストフィはBizcochueloをフリー初登、7a+とした。

アグハ・デ・ラ・メディアルナ

キフ・アルコサーとジョードン・グリッファーは北壁でHarvest Moon（250m 6b）を登った。

エル・モヒート

マティアス・コルテンは、異なったパートナーと試登した末にCamino del Guerrero（280m 5.10c A1）をロープソロした。また、クリストファー・コップルはStraight outta Nipo（300m 5 A3+）をロープソロ、ヴィタリー・ムシエンコとMosca para Mujer（300m5 A3）を初登した。

セロ・ソロ

ペドロ・フィニャとグスタボ・トマシェフスキ・ネットが北稜にAlpinissima（500m 5）を拓いた。

コルミジョ・デル・ディアブロ

フランスのクリストフ・アンリが７月下旬からパタゴニアに入り、スキー滑降を行なった。まず、ライムンド・デ・アンドラカ、ガロ・ビグエラと３人でセロ・ソロへと50kmのアプローチ後頂上から滑り、セロ・エレクトリコも滑降した。さらに、地元ガイドのフアン・セニョレとコルミジョ・デル・ディアブロのフェースを直登しようとしたが、失敗。９月17日に、今度はクラシック・ルートのリッジから頂上に立って滑り降りたが、途中で５回短い懸垂下降が必要だった。

アグハ・ビフィーダ

スペインのフアン・カナーレ、ホナタン・ララニャガ、オリオル・バロが北東壁でThe Siren to Cogan（6ピッチ、6a+）に通じるバリエーションを拓いた。また、ジョン・グリフィン、タッド・マクリー、ルイス・シャインクマンはCoganの取付きから５ピッチにわたるバリエーション（6a C1）を付け加えた。

エル・トリデンテ

マルティン・ロペス・アバド、フリアン・フェルマン、ディエゴ・シマリは中央ピラーのThe Secret of the Mountainに6ピッチのバリエーション（6b+）を追加した。

アグハ・ラファエル・フアレス

増本亮、さやかの夫妻が西壁Quilomboにダイレクト・フィニッシュ（7a）を付け加えた。

セロ・ウェムル山塊

ビエドマ湖の南西、セロ・モジャノの東にあるウェムル山塊主峰は2,300mとされてきた。ダニエル・ポンスとシュテフェン・ヴェルシュは未踏で無名のウェムル最南峰に登り、主峰より高いことを発見した。エルシングフォルス牧場を出てモジャノ・フィヨルド沿いからウェムル西側の支谷に入って６時間で最南峰の北西壁基部1,300mにキャンプ。翌日、2,100m地点から登攀にかかり、短い８ピッチ（5+ A0）で初登頂。頂上は主峰より高く、高度計は2,350mを指していた。この山名はCerro Nahumadayとなった。

パイネ・グランデ（2,845m）

2018年６月、クリストバル・セニョレとマックス・ディディエが南西壁（300m）に新ルートを拓いた。パイネではこの主峰より岩塔群（トーレス・デル・パイネ）のほうが登攀対象として人気を集め、多くのルートが拓かれてきたのに対して主峰は初登頂（1957

年イタリア隊）以来３回しか登られず、第４登は2016年にセニョレによって行なわれた。今回二人は既成ルートの左手にラインを見つけ、西稜に抜けて第５登した。ルート名はEstilo Andino（90度 WI4）。

セロ・パイネタ

セニョレはニコラス・セクルと南西壁に新ルートを拓いた。壁の右端を９ピッチにわたってたどるラインで、ルート名はPuro Filete（6c A1）。

クエルノ・エステ

セクルはレオン・リベロスとTchao Pantinの右手にあるゴールデン・ピラーに７ピッチのバリエーションを拓いたが、頁岩バンドの50m下でクラックが途切れていたため中断を余儀なくされた。

アレタ・デ・ティブロン

フランセス谷では、アレタ・デ・ティブロン東壁の左にThe 600lbs Amoebaがマックス・バーレリンとケヴィン・ストゥルマーによって登られた。出だしのスラブ（150m 5）から５ピッチ（上限7a+）をたどって南稜に合流するもの。このペアはアグハ・デ・キルキンチョス東壁でも、顕著なダイクの右をたどる５ピッチ6a+のThe Skidmarkを登っている。

モンテ・バルマセダ

2018年７月中旬、トーマス・マルシク、ニコラス・セクル、クリストバル・セニョレが冬季初登頂に成功、合わせてスキー初滑降も行なった。